

草庵仏教

第206号
(発行日)

2007年8月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/^souan

《聞法会ご案内》

○〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○〈念仏座談会〉

毎月2日および12日
午後3時より。

○真宗共学会——毎月第一と
第三木曜日午後7時より。

*8月22日同朋の会および8
月12日念仏座談会は休みます

いのちを尊ぶに思う

近年、児童のいじめや虐待

さらには殺害がしばしば起こり、そのたびに「いのちの尊厳」とか「いのちの尊さ」ということが強調され、「いのちの尊いことをしっかりと教育しなければならぬ」などと現場の教師から語られる。

そうした談話を聞くと、たしかにそうなのだが、さてそういう本人が本当に人のいのちを尊いものとして実感しているであろうかという問題が残る。

ふりかえって自分自身が、人のいのちを尊いと思ひ、尊いと感じているような生活を送っているかというところ、はつきりしながらそういう生活はできているか。いのちの尊さと聞いてもそれが身についていないのである。

人のいのちどころか自分のいのちの尊ささえ分らない始末である。ただ感じるの自分のいのちを惜しむ心、自分のいのちをみついている執着心の深いを感じる。

まことに愚かな身である。

老年になると若いときよりもなお自分のいのちを守ろう、楽にしようとの思いが強くなる。老体とは日常的な疲労感に悩まされるようになるというのである。だから電車やバスに乗ると、まず空席を探して、人に先んじてそこに座ろうとする。体を楽にしたいのである。

また病気になったりねんどりすると、他者に迷惑をかけるという恐れから、この身がそうならないように用心をし続けている。

だから人の世話どころか、まずは我が身が人の世話にならないようにと、気をつけることに傾き、他者の世話をするところまでなかなか力がそげないのである。

そういう我が身を感じるにつけ、老年になるとますます自らの身のあわれさ、浅ましさを感じられる。

そんななかで「人のいのち

の尊さ」を考えるについて、阿弥陀仏のことを思うと、阿弥陀仏は「あなたのいのちを見捨てない、あなたを必ず仏にする。あなたのいのちは仏になるべき尊いいのちなのだ」と仰せ下さっていることを感じる。自分にも人にも、へ人のいのちは尊い」などということは口に出して言うことさえはばかる私であるが、私を憶って下さる阿弥陀様が「わたしたちを大事に思ってくださいている」こと、それはお念仏のところを感じる。

私は自分も他者も粗末にしているような情けない私であるが、そんな私を大事に思ひ、ご自分を捧げてくださって南無阿弥陀仏になつてくださり、「あなたを仏にする功德は私がすべて仕上げたから、どうか助かってくれよ、助かるぞ」と仰せ下さる南無阿弥陀仏である。

しかも阿弥陀仏は私一人のためだけではない。一人一人を「一人子の如くに」大事に思ひ、救おうとされている。他の人々のいのちを真実に尊んでくださるのは阿弥陀仏であると知らされる。

そうすると、あの人もこの人も尊ぶ気持ちは薄くて、時には怒ったり、軽んじたりしてしまふ私であるが、しかし阿弥陀様は一人一人を大事に大事に憶いずめ、念じずめであり、働きかけ続けてくださっている。

「一切の群生は光照をこうむる」とあるごとく、阿弥陀仏の大悲がかかっている人びとの心でなかなかなかそうは実感できなくても、一人一人は弥陀のまことがかけられている尊い存在であることが真実であると承認し、人々を粗末にしてはならないとの仏のお心をつつしんでお聞かせいただくのである。(了)

《盂蘭盆会法要》

8月10日(金)

午後2時始まり

念佛寺にて

*8月22日の「同朋の会」は休みます。

真宗問答(二十七)

法蔵菩薩の修行

『大経』に言わく、欲覚・瞋

覚・害覚を生ぜず、欲想・瞋

想・害想を起さず。色・声

・香・味の法に着せず。忍力

成就して衆苦を計らず。少欲

知足にして、染・恚・痴なし。

三昧常寂にして、智慧無碍な

り。虚偽諂曲の心あることな

し。和顔愛語にして、意を

先にして承問す。勇猛精進

にして、志願倦きことなし。

専ら清白の法を求めて、も

つて群生を恵利しき。三宝を

恭敬し師長に奉事しき。大莊

嚴をもつて衆行を具足して、

もろもろの衆生をして功德成

就せしむ、とのたまえり。

(仏説無量寿経より)

〈現代語訳〉

そこで『無量寿経』に説か

なことに耐え忍ぶ力をそな

えて、数多くの苦をものとも

せず、欲は少なく足ることを

知って、貪り・怒り・愚かさ

を離れていた。そしていつも

三昧に心を落ちつけて、何も

のにもさまたげられない知恵

を持ち、いつわりの心やこび

へつらう心はまったくなかつ

たのである。表情はやわから

く、言葉はやさしく、相手の

心を汲み取ってよく受け入

れ、雄々しく努め励んで少し

もおこたることがなかった。

ひたすら清らかな善を求め

て、すべての人々に利益を与

えた。仏・法・僧の三宝を敬

い、師や年長のものに仕えた

のである。大きな願いを持つ

てさまざまな行を修めて、す

べての人々に功德を与えたの

である」

＊

D 「今まで、法蔵菩薩が起こ

された本願の中で主な願につ

いてお話ししました。今月は、

本願を起こされたあと、法蔵

菩薩は本願を実現するために

修行をされた部分につ

いてです。引用した一

段は仏説無量寿経の中

で勝行段といわれている

る、非常に大事なことこ

ろです。阿弥陀仏が因

位の法蔵菩薩の時にされたご

修行の内容の一部です」

S 「阿弥陀仏の前身ともいえ

る法蔵菩薩がなぜご修行され

たのですか」

D 「一つには私たちに真実

まことの心がないこと、それ

ゆえ私たちは、仏になる修行

を成就することも堪えること

もできないため、私たちに代

わってご修行になり、その結

果(仏因)を私たちに与えん

がためです」

S 「私たちには清浄真実の心

がないと如来法蔵様は見ら

れ、それゆえ仏になる能力も

徳もなく、迷いの境界をはな

れることができないことを憐

れまれて、私たちが仏になし

たもうたけになさったご修行

なのですね」

D 「ええそうです」

S 「そういうお心がこの経文

からも知られるのですね」

D 「ええ、阿弥陀仏が、経文

にあらわされたような菩薩の

行を成就して、(もろもろの

衆生をして功德成就)された

というお言葉に非常によくそ

のことが表されています」

S 「もろもろの衆生をして功

徳を成就されたとは」

D 「成就されたとは、衆生が

仏になる因を法蔵菩薩が代わ

って仕上げ、できあがった仏

因を衆生に与えてくださる、

ということですよ」

S 「次に法蔵菩薩の修行は、

〈貪りの心や怒りの心や害を

与えようとする心をおこさ

ず、また、そういう思いを持

つてさえいなかった)のほど

ういう意味ですか」

D 「貪欲のない心で修行され、

怒りのない心で修行されたと

いうことは、一つにはこの教

説は、私たちが欲と怒りをお

こし続けていて、しかも己の

そういう煩惱をどうすること

もできないこと。それゆえ煩

悩の心で修行しても、それは

真実の行いにはならず虚仮の

行でしかなく、いつまでも流

転していかねばならないとい

う私たちの姿が示されている

と思います」

S 「菩薩の修行が鏡となって、

逆に私たちは貪欲と瞋恚の心

をもっていることが知れるの

です」

D 「ええ、自分ではそれほど

欲望も怒りももっていないよ

うに思っています、自分の

心の中にはそれが根を張って

いるのです。私たちが煩惱

の深い心であつてもそうとは

知らないのです」

S 「深い煩惱はあつても煩惱

の深いことを感じなければ、

煩惱が少ないように思つてし

まうのです」

D 「法蔵菩薩がなされたよう

な(欲覚・瞋覚・害覚を生ぜ

ず、欲想・瞋想・害想を起こ

さず)というようすがたや、

あるいはお釈迦様やお釈迦様

のお弟子方は、貪欲を離れて

欲の少ない生き方をされました

が、そういう生き様から見

た私たちの生活はどうでしょ

うか。非常に欲や怒りの深い

生活をしているのではないで

一回食事をされるだけです。

そして一生、異性との性の交わりはされません。また特定の住居をもたず、主に大きな木の下とか洞窟とかで体を休められました。体を休めると言っても横になって寝られたわけではありません。座禅しながら寝られるのです。歌や観劇などの娯楽はもちろん求められません。こういう生活をして生きている人を少欲知足の人といわれるのです。そういうお釈迦様やお弟子方の姿によって私たちの生活を反省するとき、私たちがどれほど欲の深い生活をしているかが知れます」

S 「私たちは自分を周りの人たちと比べて、そんなに私は贅沢していない。私は欲は深くはないと思っていますのですね」
D 「ええそうですね。比べる対象そのものが我欲の生活の人たちと比べています。それと平生、お金のゆとりがあるときは、自分の財欲は自覚されませんが、お金の乏しくなった時、考えることは（お金が欲しい）へもう少しあったら（などとお金のことで頭がいっぱいになってしまいま

す」

S 「お金が乏しくなると、かえってお金を求める心が表面に現れるのですね」

D 「私は欲が少ないと思っていて、自分が物質的に豊かになつていてどれほどお金に依存しているかが見えなくなつていのではないかと、思います」

S 「豊かな生活になれると自分を見失つて、自分は欲望の少ない人間であるように錯覚してしまふのですね。ですから何か経済の変動で、生計の確保が難しくなつたりすると、たちまちあわててしまふのでしようね」

D 「そういう意味でも、物質的に少ないもので満足している人の方がかえつて生活に安定感があるかもしれせん。多くのもの、多くの蓄えがなければ安心できないのは、案外に不安定な生活をしているといえます」

S 「そして、法蔵菩薩は（色・声・香・味の法に着せず）というご修行をされたと続いていますね」

D 「ええ、（色・声・香・味の法に着せず）という法蔵菩薩のご修行によって、私たち

が、いかにさまざまな外のもの、姿や形にとらわれているかが露わにされます。私たちは、目に見えるもの、人の姿やふるまい、異性の姿、土地や家や家具、また映像や音楽、料理などなど、さまざまなものにとらわれ、こだわり、ふりまわされています。それを楽しんで、喜んだり、嘆いたり、悲しんだりしているのが私たち凡夫の生活です。いわゆるのまさに執着こそ、凡夫の生活の相そのものです。執着によって苦楽悲喜しているのです」

S 「次の（忍力成就して衆苦を計らず）とは」

D 「法蔵菩薩は、さまざまな苦しいことにあつても、静かに受容して平静であるということです。暑さ寒さ、病氣や飢え、人の罵詈雑言など、さまざまな困難がやってきても、それに愚痴をいわず、それを静かに耐え、受容して平静であり続ける、そういうよ

S 「このようなお姿は同時に、私たちがどういふ生き方をしているかを反映しているのですね」

D 「ええ、そうですね。私たち

は苦しい修行に辛抱することができない。暑さや寒さが厳しいときに愚痴をいい、堪え忍ぶような忍耐力が乏しい。修行の基本は辛抱心ですからね。また日常生活においても、お金に困ると愚痴が出る。迷惑をかけられると怒る。人に悪くいわれると腹を立てる。しんどいことが続くと周りの人に不満をぶつけるなどなど、苦しいことや都合の悪いことを受容できず、不足をいったり、人にたいしてやりきれなさをぶついたりします。ようするに仏教で言う忍辱の心が乏しいのが凡夫なのですね」

S 「（虚偽諂曲の心あることなし）というのは」

D 「法蔵菩薩にはうそいつわりの心、へつらいの心がないといわれるのです。私たちは利害損得にかかると嘘を言いやすいですね。なんでもないことには正直でも、ひとたび自分に利害がからんできますと、いつわりを言いやすいのです。ことに大きな損をすれば、切に切には、ごまかして切り抜けようとするのです。会社経営でもそうですね。また、自分に利益になる人には

にこにこします。自分に不利益な人には無愛想になりま

す。これらはへつらいですね。大智禪師の言葉に
面を柔らかにするは身のへつらい、言を巧みにするは口のへつらいなり

とありますが、本当にその通りですね。相手にとり入って利益を得ようとする、そういう根性があるのですね」
S 「法蔵菩薩は衆生に代わつて、浄らかで真実の心でもつて修行をされた。それは清浄真実な心もなく、生き方もできず、それゆえいつまでも流転を重ねて苦の世界に沈んでいる私たちを助けんがためなのですね」

D 「ええそれが、この一段の内容なのです」（了）

信心夜話

至心・信業・欲生我國という風に、いろいろ並べてあるが、いよいよという時になると、昔の高僧は、善導大師にしても、或いは法然聖人にしても、第十八願は我が名を称えよ必ず救うという本願である、とおっしゃるのです。その「我が名を称えよ」という一句に、どういものが感ぜられるか、そこに信があるので、極めて簡単なであります。

(我が名を称えよ)の一句は、吾々人間がどうい生活をしているか、ということを見透している者の一句である。人間の悩みを知り抜いている者の言葉である。これではどうしても助からない状態であるところの人間であるということを知り抜いて、それをいたみ悲しんで、その涙から(我が名を称えよ)という一句が漏れて出てきたのである。だから(我が名を称えよ)の一句に盛られている真実は、如何に説いても説き尽くせないところの、廣大無辺の真実をもっております。

「我が名を称えよ」の一句こそ、人間の生活をいたみ、人間のために祈り、人間のために根本的な救いを与えたい慈悲からの言葉である。

(金子大栄「本願の宗教」より)

*

この言葉からまず感じられるのは、これは真宗の大学者である金子先生の衷心より出た言葉のよう思う。

ちやうど、歎異抄第二章にある「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よき人の仰せをかぶりて信ずるほかに別の子細なきなり」というお言葉は、宗祖の信心の核心を吐露された言葉であるように。

「我が名を称えよ」という一句に、どういものが感ぜられるか、そこに信がある」との仰せ。金子先生の信心はまさにここに表白されている。先生の膨大な著作や講演は、この信心からあふれ出た百花ではあるまいか。

宗祖は「ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべし」の仰せに信順する信心。

法然聖人は「ただ、往生極樂のためには、南無阿弥陀佛と申して、疑ひなく往生するぞと思ひとりて申すほかには、別の子細候はず」と遺言された。

源信僧都は「極悪深重の衆生は、他の方便さになし、ひとえに弥陀を称してぞ浄土にうまるとのべたまう」との仰せ。

善導大師は、第十八願を「もし我成仏せんに、十方の衆生、我が名号を称せんこと、下十声に至るまで、もし生まれずば正覚を取らじ」と示され、道綽禪師は「縦令一生造悪の衆生引接のためにとて、称我名字と願じつつ、若不生者とちかいたり」とのお心を表された。昔の高僧方はいよいよとなると、第十八願をこのように念仏往生の願として信順されたのである。

自分は今までどうい生活をしてきたか、また今どうい生活をしているか、そしてこれからどうい生活ができるか。それを底の底から「知り抜き、見通された」のが如来法蔵様である。そしてその結果は凡夫の生き様は、一生造悪であり、極重悪人であり、煩惱熾盛の凡夫の姿であると、見られたのである。それゆえ金子先生は「(阿弥陀仏は)これではどうしても助からない状態であるところの人間であるということを知り抜いて、それをいたみ悲しんで、その涙から、我が名を称えよという一句が漏れてきたのである」と仰せられ、「その「我が名を称えよ」という一句に、どういものが感ぜられるか、そこに信があるので、極めて簡単なであります」と結んでおられる。(了)

《住職雑感》

「人間死んだら終わり」とか「死んだら何も無くなる」とい言葉をよく聞く。はたして、そうであるうか。そんなに簡単にそう言えるのであるうか。

人間が死ぬというのはどういことか。近年までは心臓死によって、判定していたが今日では脳死が死とされる。脳死とは脳の神経細胞システムが働かなくなることをいう。そうすると肉体を外から見ると、動かなくなる。呼んでも答えず、眼球も動かず、心臓も鼓動をしない。いわんや手も足も動かさない。そうなった状態いわば肉体が動かなくなった状態、そして元に戻る可能性がなくなつた状態を「死」と呼んでいる。

しかしその「死」は、どこまでも他者の死であつて、自分自身の死ではない、いつでも「死」を経験するのは他者の姿においてだけである。自身自身の「死」はだれも経験していない。

だからそういう「死」は外から見た人間の肉体が動かなくなったこと、それを「死」と名付けているのである。

もし自己というものが目に見える肉体だけのものなら、肉体が動かなくなつて、焼却すれば骨と灰になり、一応その人は無くなつて、(無)になつたと云えるであろう。しかし、自己自身は目に見える肉体だけの存在であろうか。むしろ自己の自己たる所以は心にあるのではないか。ダンマパダに「ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によつてつくりだされる」と釈尊は説かれているように、心が主であるゆえ、自己の主体は心の側にあると云える。しかし、その心は目に見えない。生きている今も目に見えない。だから火葬しても見えないのは当たり前である。心は物質とは正反對の性質である。だから物のように目にも見えないし色も形もないし、物質のように重さもあるとはいえない。また心は、物質のように「ここにある」「あそこにある」といような一定の場所に

あると、限定できない。そして本質的に心は物質のように対象化して観測できない。脳システムを観測して心を知るといのは、心を知る単なる(一つの)アプローチに過ぎなく、それによって心そのものは到底知れるものではなからう。脳の神経システムが働かなくなつたら、心は無くなつたのであるうか。裏からいうと、脳細胞が心を生み出しているのだから。タンパク質を基体とする物質である脳が、物質ではない心を生み出すことができるのか。この世界の物質の生産過程はすべて物質からは物質からしか生まれぬ。なのに、脳という物質だけが物質でない心を生み出せるのであるうか。もし脳が心を生んでいるのなら、脳死は肉体の死だけでなく、心の死であるから、身も心も無くなる、いわば何もなくなつたと言い得よう。しかし、心は脳の活動と関係があつても脳システムの中に収まるものではないとすれば、肉体の死すなわち脳死によって、心も無くなるとは単純には言えない。(了)